関西大学政治学研究部
2009 年度後期勉強会　α班　第 4 回

学歴格差社会

2009 年 11 月 16 日

松本　隆宏

1.はじめに

学歴社会というのは、過去から現在にいたるまで重要な問題として取り上げられてきた。学歴によって不当な扱いを受けることや就職のときに学歴が不利に働くことなど不利益を被ることは現代の社会では多くみられる。一方、高学歴を得ることによって自分にとって有利に働くこともある。そしてこれらは平等な競争のもとで学歴を得ることができると信じている。しかし、本当にそうなのか。このような問題を解決するにはまず日本の学歴社会がどのようなものかを知り、そこから検討していくことにする。

2.1950 年代～1970 年代後半の状況

1950 年の高校進学率 42.5%→1974 年の進学率 90%
普通科への進学…ホワイトカラー・グレーカラーが多い
職業科への進学…ブルーカラーが多い

3.日本特有の学歴社会の誕生

日教組の共通の考え…生徒に差別観をあたえない教育＝良い教育
1950 年代…教育機会の格差＝貧困問題
能力の可変性への信仰＋テストの学力は実力ではない＋生徒の差別観を問題
↓
能力＝平等主義
↓
画一的な平等を教育に求める
↓
教育機会の拡大
↓
メリトクラシーの大衆化
↓
同一の基準での公平な選抜の普及

4.学歴社会による問題点

⑵学校の不平等の再生産機能の隠蔽

⑶学歴による就職格差

5. おわりに

日本の学歴社会について検討していったが、教育の機会の平等とは程遠いものであり、親の出身階層や親の所得などで格差が存在し、その格差が認知されにくい状況があった。日本の社会は学歴を得る前の段階から格差があり、そのことが問題になりにくい社会である。さらに、社会に出てからも学歴によって階層が固定化されやすい状況ができている。今の社会は機会の平等が守られていない社会だと私は考える。

参考文献

荒井一博　『学歴社会の法則　教育を経済学から見直す』2007 年　光文社新書
苅谷　剛　『大衆教育社会のゆくえ　学歴主義と平等神話の戦後史』1995 年　中公新書
吉川　徹　『学歴分断社会』2007 年　ちくま新書
近藤博之　『日本の階層システム 3　戦後日本の教育社会』2000 年　東京大学出版会
橘木俊詔　『格差社会　何が問題なのか』2006 年　岩波新書
原　純輔　『日本の階層システム 1　近代化と社会階層』2000 年　東京大学出版会